

熊本学園大学 外国語学部 第10号

英米学科 GAZETTE

平成30年6月
発行・編集
熊本学園大学 外国語学部

巻頭言

ご挨拶

外国語学部英米学科長 塩入すみ

4月に英米学科長となりました塩入と申します。よろしくお願いたします。日本語教育が専門です。2010年本学に日本語教員養成課程が設立して以来、毎年外国語学部の学生20名前後がこの課程を修了し、卒業生の中にはシンガポール、台湾など海外の学校、国内の専門学校で日本語教育に従事する人もいます。

日本語教師にとって大切な資質は「日本語を母語としない人の眼で日本文化や日本語を見られる」ということです。そのためには「僕はウナギだ」が英語や中国語ではどうかという対照言語の発想と、自分も異文化で孤独を味わうという文化的経験が不可欠です。私の恩師は高校の英語の先生をしていた人で、大学の日本語教育分野の草分け的存在でしたが、よく「英語とアジアの言語を一つ身につけなさい」と言われました。英語を学ぶ学生たちにそんな眼をもってほしいといつも思っています。

ゼミ紹介 (向井ゼミ：アメリカ文学)

3年生の専門演習Ⅰ(通称ゼミ)では、1年を通して、アメリカの社会、文化、歴史などを背景とした小説を読み、その映画化作品やテーマの近い映像作品を鑑賞した後、気になる点を徹底的に議論します。そして最終的にはそれぞれが納得した結論を出して小論文にまとめます。この繰り返しを何度か行い、こうしたプロセスを心地よいと思った学生は、引き続き4年生で卒業演習というゼミを取って、卒業論文を書くことを選択します。完成した卒業論集は、図書館の3階の卒業コーナーに納められ、いつでも読めることになっています。

本学科のゼミは、基本的に学生たちが希望する先生のゼミを選んで構成されているため、細かい好みの違いこそあれ、そのメンバーたちの根本的な興味や関心は、皆同じ方向を向いており、授業は和気あいあいと進んでいきます。ただ毎年、その学年のゼミ生のカラーというものがあって、議論が思いも寄らない方向へ進んだり、思った以上に小さなトピックで議論が盛り上がり、議論はさっぱりだったのに提出された小論文の出来は良かったり、おとなしく目立たない学生がいきなり大胆な発言をしたり、など予想以外の展開に

なる面白さも、ゼミの授業にはあります。

ちなみに、今年の卒業論は力作揃いで、特に良く書けていたのは次の三作——ハリウッド映画の名作をキリスト教精神に基づいて、セリフを丹念に読み込み丁寧に論じた「*Prisoners* ——囚われし者たちの苦悶と救い」、世界的名作をユニークな視点から切り込み大胆に論じきった「*The Scarlet Letter* の跳躍——方法と意思のアメリカン・ロマンス」、そして、ノーベル賞作家の代表作に教育理論を応用して、着実に結論を導いた「*Light in August* における Joe Christmas のアイデンティティの拡散—— Erikson の発達課題をもとにした考察」でした。来年もどんな卒業論を完成させてくれるか楽しみです。



書籍紹介

堀田隆一『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』、研究社、2016年、2200円+税

中学1年生の頃だったか、英語の先生が黒板に“to be to be ten made to be”という文(?)を書き、これをどう読むかと問うたことがあった。「トゥービー トゥービー…」と読む声がする教室に対して、「ローマ字読みだと意味が通じるのに、英語に慣れてくるとそれに気付かなくなる」という話が続いたように記憶している。その時は「なるほど」と思ったが、しかし、英語はなぜローマ字読みをしないのだろうか。この疑問は時が経つうちにどこかへ消えてしまったが、大学に入り、「英語史」の講義で再会することとなった。答えは、15世紀から17世紀に生じた「大母音推移」という現象で長母音の発音が変わった一方で、綴りは

昔のまま現在まで残ったためである。この問題に限らず、今の英語に見られる不規則さは、多くの場合、歴史を抜きにしてはうまく説明できない。

本書は、上に述べた綴りと発音の関係以外にも、不規則な複数形 (children)、仮定法過去の were (If I were)、英米の違いといった、中高生など英語学習者が抱きやすい(しかし見過ごされがちな)素朴な疑問を取り上げ、歴史的観点から丁寧かつ明快な説明を加えている。本書の特徴は、単なる雑学的解説ではなく、素朴な疑問点が、体系的・専門的知識へつながるように書かれている点である。さらに詳しく学びたい読者には、著者によるコンパニオンサイトも用意されている。英語教員はもちろん、英語の「なぜ？」に興味を持つ生徒にも薦めたい一冊である。

渡辺拓人 (英米学科講師)

フレッシュマンキャンプ

大学の体育館での入学式のあと、クラスがひとつの教室に集められたときの、あの居心地の悪さ。誰かに話しかけたくても、なかなか勇気が出ない。ことに大学はさまざまな地方から集まってきているから、よけいそうだったのだろう。なんとか隣の学生に声をかけたとき、その顔がわずかにほころんだのを、今でも覚えている。「ああ、彼も話しかけられてうれしかったのか」と、ほっとした。

これは45年も前の話だが、今の英米学科の新入生も同じだろう。そこで学科では、少しでも快適に大学生活を始めてもらえるよう、フレッシュマンキャンプを実施している。これは4月初めの土日、大学の研修所に一泊して互いに交流してもらう行事。英米学科は語学をはじめとして必修科目が多く、仲間と同じ授業を受ける場合が多いから、互いに知り合っておくのはなおさらだ。

二日間新入生の世話をするのは30人ほどの上級生。

彼らはまた、新入生に対しさまざまな助言を与えることになる。高校までとはまったく違う授業の仕組みや生活のあり方に直面し、当惑しているであろう新入生たちが、これによりその後へ向けなんらかのヒントを得てくれるのを期待している。さらにOB、OGと語り合う時間も設けている。彼らは留学経験者だったり、教職に就いていたり、その他の業種に就職している卒業生。この語り合いを通して、今後の勉強の方向性を見つけてもらうことも目的のひとつである。



編集人 塩入 すみ (英米学科長)

〒862-8680 熊本市中央区大江 2-5-1

TEL: 096-364-5161 (代表) Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp